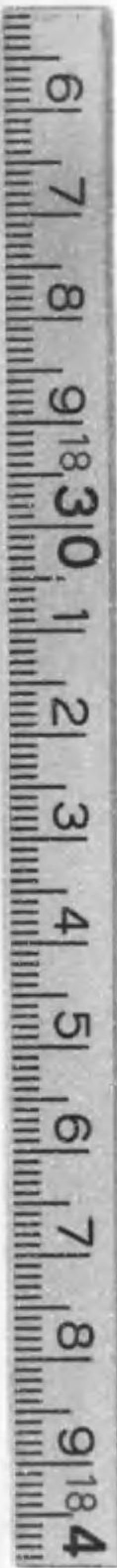
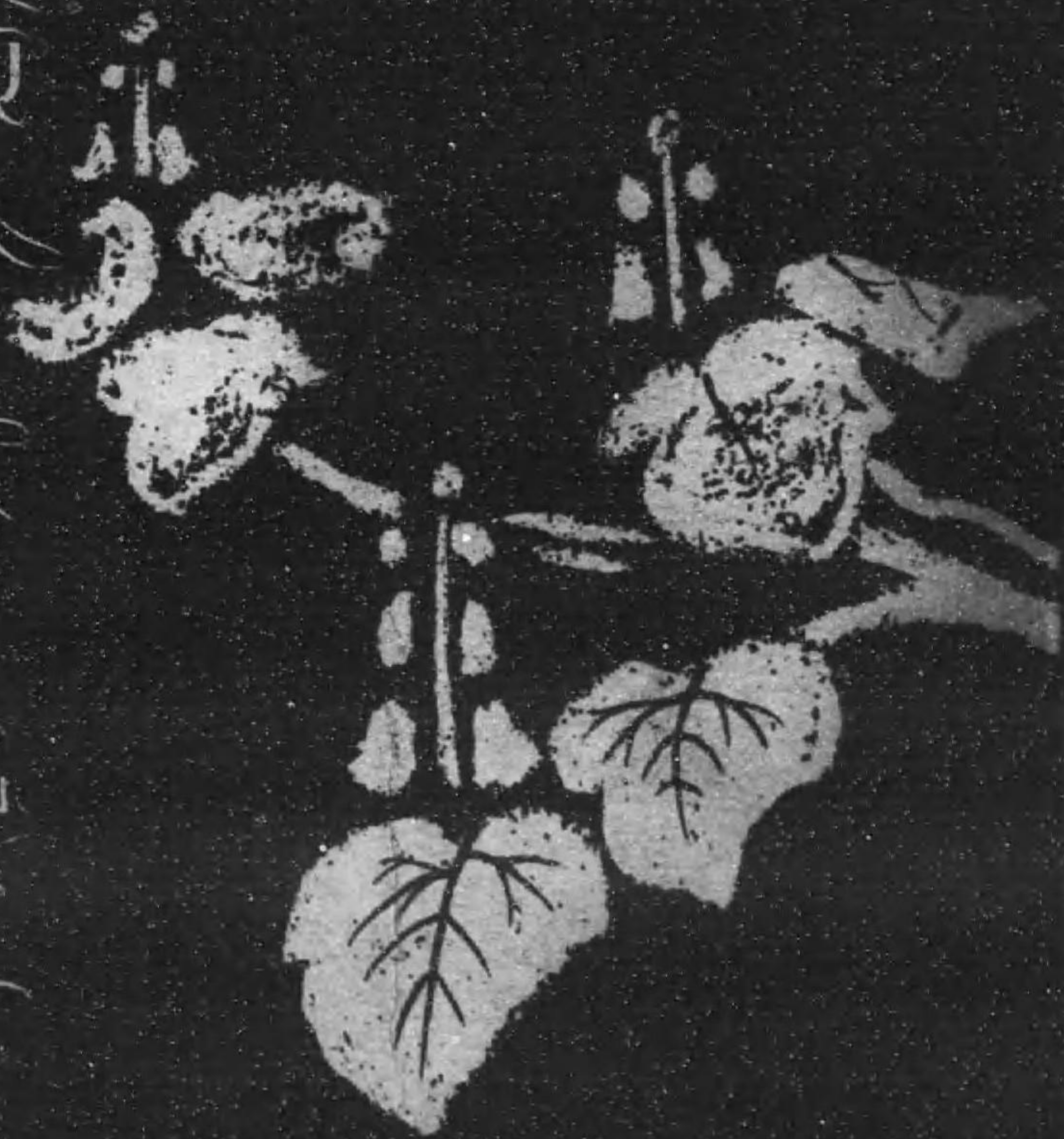


特 216

936

本讀

橋本左内先生



始



特 216
936



本左内先生



はしがき

今や聖戰正に第五年を迎へ愈々新東亞共榮圈を確立し進んで世界新秩序を建設せんとする超非常時に際し、益々日本精神の昂揚に努め臣道實踐の實を擧げねばならぬ。

本校深く思をこゝに致し、日本精神の權化ともいふべき郷土の生んだ幕末の偉人橋本左内先生の精神に浸り興亞教育の一助ともなさばやと念願し、本書「讀本橋本左内先生」を編纂したのである。

然し乍ら本書編纂に志してより日極めて淺く、加ふるに業務多端にして資材蒐集もはかばかしからず未だ意に満たざる所多く、先生の御精神に副はざるやをおそろゝも、時局の逼迫と適切なる副讀本なき今日、これがいつまでも遷延を許さざる感あり。ここに斷乎印刷に附し

大方諸賢の御叱正、御指導を仰ぎ、後日更に改輯したい考である。若し本書が幸に兒童に副讀本としての價值をあらはし、興亞報國の一助ともならば望外の仕合せである。

本書の資料は主に「景橋本左内」偉大なる「景岳全集」青「橋本左内先生誕生百年祭記要」等より拜借し又景岳會長岡田大將閣下、工學博士仙石 亮先生、其の他諸名士の御後援、御指導の賜なることを感謝する次第である。

本書取扱上

- 一、本書叙述の形式内容を低學年、中學年、高學年の三部に分けた。低は一二年、中は三四年、高は五年以上の智能に準據した。
- 一、史實に誤なきを期し、課外副讀本としての使命を持たせることに努力した。
- 一、挿繪は當時を想像し當校訓導が描いたものであるが不十分の点は諒せられたい。



橋本左内先生肖像

先生の筆蹟

但知遠主甘委命於鴻毛矣復倫生
期畧尸於馬革

戊午仲秋病中書呈
懸書長兄

葉正紀

常山之鬣侍中三血日月韜光山河改色
生為名臣死多列日星

戊午仲秋病間書呈
倫漢盪兄

葉正紀

一 一 一 一
啓發五自
去 振 立 勉 交
心 氣 志 學 友
揮 交

以上五自少年學入門中
トコ、口工審勝申候者也

為足羽學校

昭和十五年十月

海軍大將岡田啓介敬書

編 印

目次

低 學 年	
一、オ 日 ガ ラ	一
二、ド ウ ザ ウ	二
三、グ タ ノ オ ト	三
四、タ コ ア ゲ	四
五、ゴ マ ン ザ イ	六
六、キ エ ナ イ ア カ リ	八
七、ヌ キ ガ キ	一〇
八、ト キ ハ ノ 井 戸	一四

中 學 年	
一、池 の 中 の 龍	一一

二、先生の父母	二二三
三、先生の勉強	二二七
四、焼け火ばし	三一
五、かんにん	三四
六、御あいさつ	三六
七、恩返し	四〇
八、乞食ノオ医者	四四
九、お醫者の大中小	四八
十、先生の御兄弟	五〇
十一、二十六年の一生	五四
十二、先生のお墓	五七
高 學 年	
一、常磐の井戸	六三

二、啓 發 録	六四
三、適塾の生活	六八
四、名 醫 ぶ り	七〇
五、江 戸 遊 學	七二
六、ゆらぐ世の中	七六
七、名君春嶽公	七八
八、開 港 論	八〇
九、將軍の世嗣	八三
十、秋深し傳馬町	八七
十一、香煙立ち上る先生のお墓	八九
十二、先生の國体觀	九二
十三、先生 の 詩	九四
十四、春嶽公の歌	九八

低學年用

目次

四

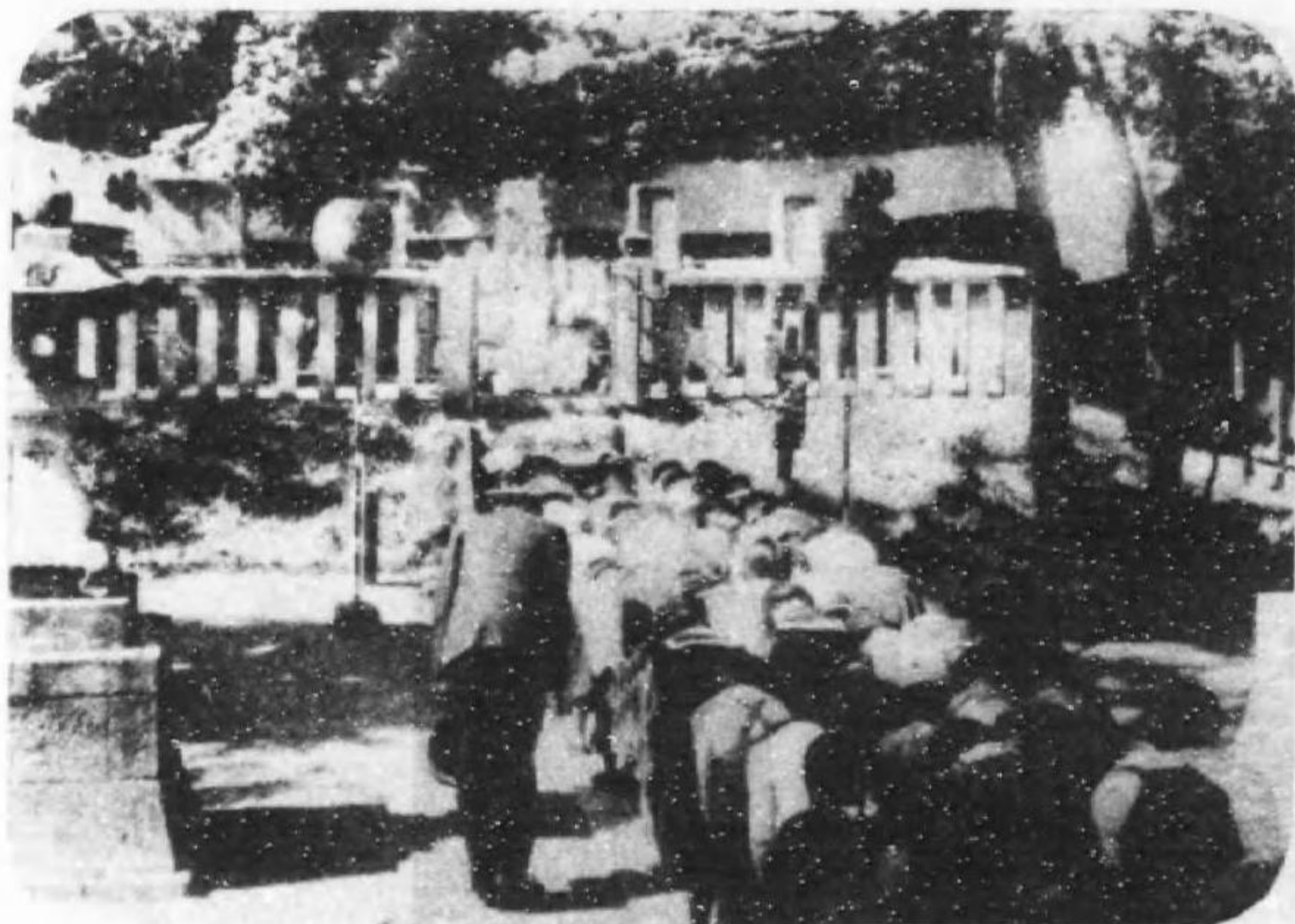
十五、時局に思ふ……………一〇〇

附 録

一、啓 發 録……………一

二、橋本左内先生年表……………一三

三、橋本家系譜……………一五



カハオノイセンセイナサ

一、オ日ガラ

十月七日

グワツナノカ

ケフハ
サナイセンセイノ

オナクナリニ
ナッタ

オ日ガラ
デス。

今^{イマ}オマツリ
ナノデ

オマキリ
シテキ

マス。

二、ドウザウ



ウザウド ノ イセンセ

コレハ アスハ山
 ノ 上^ウニ アル
 センセイ ノ ド
 ウザウ デ アリ
 マス。

三、ゲタノオト

カラシ カラン
 ゲタ ノ オト
 ハシモト君^{クン} ガ
 ヤッテ キタ。
 ミンナ ガ
 オギヤウギ ヨク
 シヅマッタ。



S.K

四、タコアゲ

先生^{セン}ハ 小^チサイコロカ
 ラ、 トモダチト イヒア
 ラソフヤウナコトガ、 一
 度^ドモアリマセンデシタ。
 アル日、 先生ガ 何^{ナン}人^{ニン}カ
 ノ友^{トモ}ダチニマジッテ 大^{ダイ}ス
 キナタコアゲチシテチラ
 レマスト、 一人ノ小サイ



子ガ、 ワザト先生ノタコニ イトチカラメツケ
 テ、 オトサウトシマシタ。 先生ハ ソノ時スグ
 サマ小^{セウ}刀^{タウ}デジブンノイトチ切^キリ、 何モイハズニ
 サッサトウチヘカヘッテシマハレマシタ。
 ツマラナイコトニ ケンクツチスルノハ、 ワラ
 ベレイコトダト、 ヨクワカッテキラ
 レタカラデス。
 又、 モシ トモダチガ小鳥ヤ虫
 ナドチトラヘテ、 クルシメタリス
 ルト、 マルデ大^{オトナ}人ノヤウナ口ブリデ、 ソノヨク

ナイコトヲヨクノイヒキカセマシタノデ、ダ
レデモ ^{ココロ}心カラワルカッタトキガツイテ、先生
ノコトバチマモッタトイフコトデス。

五、ゴマンザイ

「ゴマンザイトハ……。」トヤウキナウタゴエ
ニツレテ、サエタツヅミノ音がキコエテキ
マス。イゼンハ、オ正月ニナルト、イツモコノ
ゴマンザイガマハッテ来マシタ。ソデノ大キイ、
カハッタキモノニ、メウナバウシチカブッテ、フシ

オモシロクウタフノデ、大ゼイノ子ドモガ、ア
トカラゾロノツイテア
ルイタモノデシタ。
先生ノオトウサンハ
コレガオスキデ、オキヤク
サマノイラッシャル時ナド、
ヨクヤシキノウチヘヨ
ビ入レテ、オキヤクサマノ
マヘデマハセマシタ。
シカシ、コノニギヤカナ



オセキヘ、先生ハ

一度モ出テキラレタコトガナク、イツモジブン
ノツクエニムカッテ、ネッシンニ、ベンキヤウチ
ツケラレマシタ。

六、きえない あかり

むかしは、よるあかりをけしてやすんだ
ものです。先生のすぐお向^{むか}ひにすんでゐた
おぢいさんが、どんなよふけにも、先生のおへ
やに、あかりのきえたことがないので、

「左内さんはいつやすまれるのだらう。」

といはれたさうです。同
じ年ごろの子どもたちが
まい日、せみとりや川
あそびにむちゅうになつてゐ
るとき、先生はこれほ
どねっしんによるもひる
もべんきやうをなさいま
した。

こんなふうでしたから、
わづか十歳^{さい}の時に、むづかしい三國志^{ごくし}をりっぱ



によみこなし、十五では、あの大人もおよばな
いけいはつろくを おかきになり、早くお上かみの
おやくにたつ人に なられたのでせう。

七、ぬきがき

「ねえさん。なにをかいて いらっしゃるの。まだ
おべんきやう。」

「これね、ざっしの中の 大せつなことばの
ぬきがきよ。」
「なぜそんなことを するの。」

「ちよときいていらっしゃい。」

けんかう 十そく

- 一、外でうんどう ほがらかに。
- 二、光ひかりにあたれ 日にあたれ。
- 三、きよいくうきを いつもすへ。
- 四、なんでもたべよ よくかんで。
- 五、早ね早おき よくねむれ。
- 六、ほどよくやすんで 力をやしなへ。
- 七、からだはどこも せいけつに。
- 八、はだぎきれいに あつぎせず。

九、^{ただ}正しいしぜんのしせいをたもて。

十、やまひをふせげみをまもれ。

ねえさんはね、これをこのかべにはっておい
て、きつとこの十のことをまもるつもりよ。

今日がっかうで

『はしもと左内先生は本をよんで、これは大
じなことだとおもはれると、すぐぬきがきし
て、つくゑのそばへはりつけられ、^ヤ日夜じっ
かうされた。それでつくゑのあたりは、はら
れたぬきがきで一ぱいだった』

といふお話を先生から
きいて、ほんたうに
か
んしんしてしまった。それ
でさっそくねえさんもそ
のまねをしただけよ。』
「さうだったの。けんかう
十そくは私にもできさ
うだから、ねえさんにま
けないでやってみるわ。』
「それはよくきがついたね。おかあさん。き



みちゃんは大へんおりがうになりましたね。」
 「え、二人ともあまりおりがうなので、さっきからおかあさんはうれしくきいておりましたよ。しっかりそれをまもって、二人ともりっぱなからだになって下さいね。」

八、ときはの井戸

ぼくたちは九十九橋^{ほし}をわたって、ずんく北へすゝみました。さうしてちと右へまがると、
 大和上町^{やまとかみちやう}のきれいなお寺につきました。くろい

門の前に、高い石のはしらが立つてゐて、ぼ



寺ンネンセ

くはみんなよめませ
 んが、左内先生がお生
 れになった所だといふこ
 とが、太いじでほってあ
 りました。門をはいると、
 すぐ井戸が見えました。
 その井戸は、四かくな石
 で、上に竹をひもでむ
 すんだふたがしてあります。一本の赤松が

井戸の上にえだをひろげ、そのうしろにふぢがひくくしげてゐます。「橋本左内先生がお生れになった時、この井戸の水でうぶゆをなされたのです。むかしこのあたりをときは町といたので、ときはの井戸といふのです。」と先生がおっしゃいました。そばの石にときはの井戸とほりつけてあります。井戸の外ほかに何一つ昔のまゝの物はありません。ぼくが、井戸の外と聞きますと、

「せんねん寺といふのです。」とおっしゃいました。おみどうの戸をあけて、お寺のおばあさんがかほを出されたので、先生がそのおばあさんに、いろいろお聞きになりました。おばあさんはこくししながら、

「私は左内先生にくんけいはありません。むかし先生がいつもおべんきやうをなされたひろいどざうは、明治めいじの大くわじまではのこつてゐたのですが、くわじの時やけてしまったのです。むかしこのあたりは大へんじづかでした。」

この間、^{あひだ} 遠い所の人が、「この井戸のそばの土で
もいゝから、きねんに下さい。」と行って持って行
かれました。うらの川は、先生のおいでになった
時は、もとききれいでした。」
とお話して下さいました。ぼくは、おかあさ
んと来た時、うらの川にかけてある小さな橋
に、けいがかく橋と書いてあるのを、思ひ出し
ました。ぼくらは、うらへまはって、けいがかく橋
の上に立って、川を見ました。むかしからなが
れつづけてゐた。この水は、山にある。どうぞ

うのやうな 先生のおすがたを うつしたこと
も あつただらうと 思ひました。それから お
ばあさんに さやうならをして かへりました。
かへる道々、ぼくも 先生のやうな えらい人
にならうと 思ひました。

一、池の中の龍^{りゆう}

皆さんは繪にかいた龍を見たことがあるでせう。をろちのやうに大きくておそろしい顔、するどい足を持つてゐて、いつもはおとなしく池の中に住んでゐても、時に雲が低くたれこめる夕立がやつて來ると、急にその雲に乗つて天に昇るといはれてゐます。

橋本左内先生は小さい時からしつかりした人で、七つの時から勉強をおはじめになりましたが、その頃のむづかしい字のある、讀みにくい書物を相手に、よくはげんで、お友達よりはずつと勝れてゐたために、後に師



S.K.

匠から、「池の中の龍のやうだ」と言はれるほどになりました。それは丁度池の中に住む龍が天にも昇るやうに、もうしばらくすると學問も武道もずつと進んで、誰も肩くらべが出来なくなるだらうと思はれてゐたからです。

それ程のえらい先生がお生れになつたのは、一體いつ頃だつたでせうか。大体今から百十年程も前のこと

で、日本のお國は、天子様の御命令によつて、幕府が治めて居り、又その頃は日本は外國とはつきあひをせず、閉ちこもつて居たために、大分おくれてゐました。それで油斷をしてゐると、外國からはづかじめを受けるのではないかと、忠義な人々が心配しかけた頃なのです。

二、先生の父母

先生のお家は代々お醫者で、福井市内の常磐町(今の大和上町)に住んで居られた。お父さんは長綱といつてけがを直す醫者で、身分は

大へん低かつたが、心の正しい人だつた。そして先生が十九の時になくなられた。その時枕もとで、「お前は少しくらゐ勉強が出来るからといつて、決してあはつてはいけないよ。なまけて御先祖やお父さんをはづかしめるやうなことがあつてはならないぞ。殿様や目上の人を敬ひ、親類や兄弟とは仲よくして行けよ。」と誠められたさうだ。

お母さんは梅尾といつて、この人もしつかりして居られ、先生の子供の頃はお母さんを大へんこはがつて居られたさうだ。お正月などには今でもたまに萬歳が来て面白い歌や踊などを鼓に合せてやつて見せる

が、その頃もよく萬歳が廻つて来たので、子供たちもめづらしさうにその萬歳の行く方へついて歩いたが、先生のお母さんは先生の御勉強中にその萬歳が来ても、決して見させなかつた。先生も亦子供ながらお母さんの心持をよくくんで一心に勉強してをられたので、そんな萬歳にぞろ／＼とついてあるく子供の中には、先生のお姿はついぞ見かけたことがなかつたさうだ。

かうしたきびしいお母さんは又とても子供思ひだつた。先生が江戸(今の東京)で勉強してをられた時、福井に大火事が起つて先生のお邸も焼けてしまつた。

親類の人たちはお母さんが余り氣の毒なので、江戸に居られる先生に歸るやうにお手紙を出さうとした。するとお母さんは、「せつかく勉強のため江戸へ行つたのですから、こんなことを知らせて心配させたくありません。どうか手紙は出さないで下さい。」と言つてたのまれたので、とう／＼知らせることを止めにした。後で聞いた先生は、殿様から褒美にいただいたお金全部をお母さんに送つて、「お家を建てる足しにして下さい。」と書きそへられたといふことである。

三、先生の勉強

「お父さん、橋本左内先生は百年ばかり前に、福井に生れた人で、ずる分えらい人だつたさうですね。今日學校でちよつと先生から聞きましたよ。」

「さうだとも。お若くてなくなつてしまはれたので残念だつたが、もつと長生きして居られたら、ずる分えらい人になつてお國のためにつくされたらうに。」

「幾つでなくなられたのですか。」

「二十六の時だつたさうだ。もう十五くらゐの時にその頃の大人の學者にも負けぬほどの學問が出来て

ゐられたさうだよ。」

「すると僕は今十一だから、僕くらゐの時にはもう大分むづかしい書物もお読みになつたでせうね。」

「さうだ。やつぱり正男たちと同じやうに七つの時から師匠について手習やむづかしい字の書物を習はれて、十の頃にはもう三國志といふ支那の書物で大人でもなか／＼読めないものを樂に讀まれたといふから、驚く



ではないか。又十五の時には自分を誠めるために、あの名高い啓發録といふのを書かれたのだ。その題目だけは正男たちの教室にも先生のお寫真と一緒にかけられてあるだらう。」

「え、稚心を去れ、志を立てよ、勉學せよ、氣を振へ、交友を擇べ。」といふのでせう。十五ぐらゐであんなりつばな言葉を考へ出されるくらゐだから、ずる分一生けんめいに勉強されたのでせうね。」

「それはもう、朝早くから書物をお讀みになり、書方のけいこをされ、晝は劍道や柔道を習はれた後、お父さんの仕事を受けつぐために醫者の學校濟世館に通はれ、

又時には繪の先生について圖畫まで習はれたといふことで、晩や朝はいつ見ても先生のお部屋に燈火がともつてゐたといふことだよ。」

「すると、少ししか寝ないで勉強をなさつたわけですね。」

「一日に正男らは九時間くらゐは寝るだらう。夜九時に寝て朝六時に起きるとしても丁度九時間だ。ところが先生は十五六の頃になると、四時間くらゐねてあとは勉強の時間に使はれたさうだ。」

「へえ……。左内先生はずる分の勉強家だつたのですね。」

四、焼け火ばし

(一) 先生十の時だつた。

塾で勉強の最中に、

一人の子供があやまつて

自分の指にけがをして、

赤い血を出し泣き出した。

(二) それを見つけた友達が、

皆で先生を困らしよと、

先生のまはりを取り巻いて、

「お前は醫者の伴だぞ。」



「さあ此の指のけがなほせ。」

(三) すると先生奥へ行き、

出て来た時に手に持った

眞赤に焼いた焼け火ばし、

「さあなほすぞ。」とかう言つて、

けがした子供のきづ口へ。

(四) 「あつ。」とびつくり一同は、

師匠のもとへかけつけた

お師匠さんは、先生を

呼び出しおいてわけ聞いた。

「何でいたづらやつたのか。」

(五) 「私はやけど直すなら

父にならつて知つてるが、

生きづなほすはうはふは

知りませんから、このきづを

やけどにかへてなほします。」

(六) 何のわるびる風もなく

元氣な答に一同は、

ポカンと口をあけたまゝ、

すごくそこを出て行つた。

とがめは何も受けなんだ。

五、かんにん

「青表紙ヤーイ、いくちなしのアホンボ！」先生が子供時代に人一倍勉強が好きで、外の子供が歸つてから後も長くとどまつて勉強に精を出し、おそくなつて師匠にさようならをしてうちへ歸る途中、とんぼ釣りや戦争ごつこをしてゐる友達がかう言つて先生をいぢめることがありました。

その頃の福井では余り學問が進んでゐなかつたので、一心に勉強する人も割合に少かつたのでした。それで狩や武道などの勇ましいけいこをする武士たち



J.K.

は勉強好きの武士たちを、「青表紙、々々々」と悪口を

言つたさうです。青い本の表紙だと言ふ氣持で、勉強する人が青い顔をしてゐるのにひつかけて馬鹿にして言つたのでせう。

先生が塾から歸られる時に何度こんな悪口を聞かされたか知れませんが、しかし先生がだまつて相手にならずにそこを通り過ぎると、今度はこはくて手が出せな

いと思ひ込んだ子供たちは、木の蔭かげから小石を投げたり、つばをはきかけたりしました。それでも知らぬ顔で通り過ぎるので、さすがのいたづらつ子たちも根氣負けをして、先生にはいたづらをしなくなつたといふことです。

先生がどんなにかんにんの心が強かつたかがこれでもわかるでせう。

六、御あいさつ

十月七日、朝會の時に校長先生が次の様なお話をされた。

「今日は十月七日で左内先生が亡なくなられた命日です。先生がどんなに禮儀正しい人であつたかがわかるお話を一つして上げませう。

先生が十五歳の時、弟の琢磨たくまさん——あとで綱常かうじやうと名のかはつた人です——をつれて小林といふ師匠の處へお弟子入りをお願いして來るやうにお父さんから言ひつかりました。琢磨さんはその時たつた五つでした。



その頃は今の様な学校はありませんので、勉強したい人はお師匠さんのところへお弟子入りをするのです。そこでは年にきまりはありませんが、六つぐらゐから十四五ぐらゐの少年たちが、疊へすはつて机の上に書物をおいて讀方や書方や算盤を教はるのです。先生はお父さんの言ひつけ通りにすぐお師匠さんの家へ行き、弟のために御厄介になることになりました。「此の度琢磨が先生に御厄介になることになりました。まだ年も小さくて何かと行きとどかぬところが多いございますでせうから、どうぞよろしくお願ひ申します。」

隣の部屋には丁度小林先生の親類の人が来てその御あいさつを聞いてみました。左内先生が歸られた後、小林先生に向つて、「今居た大人の方は誰ですか。」「いや今のは橋本左内と言つてまだ十四か五ぐらゐの子供ですよ。」「へえー、あまりあいさつがうまいので大人の人かと思つた。」と言つてびつくりしたさうです。皆さんもすぐに十四五歳の年になるでせうが、これだけの御あいさつが出来ますか。

禮儀は人の氣持をやさしくします。皆さんも左内先生に負けぬやうな立派な禮儀の正しい人になつて下さい。」

校長先生の話がすんだ時、僕は左内先生を本當にえらいなあと思ひ、僕もこれからは禮儀をしつかり守つて行かうと決心した。

七、恩返し

先生は十四五の頃、福井の學者で吉田東篁といふ立派な先生のところでしつかり勉強してをられました。が、もつとく勉強して立派な人になりたいといふので、お父さんのお許しを得て大喜びで書物箱を背負ひ、大阪へ行かれました。そしてその頃日本國中に名高い緒方洪庵といふ先生のところへ弟子入りをされま

した。そこには日本國中から左内先生のやうに志をたてた勉強好きの人々が集つてゐますし、又書物もオランダといふ外國の書物で勉強するのですから、なかなか大へんです。

しかし先生は、こゝでも誰よりも熱心に勉強され、次第に兄弟子を追ひ越して、洪庵先生や兄弟子たちを驚かすやうになりました。

しかし残念なことには先生にはあまり學資が豊でなかつたので、先生の讀みたいと思ふ本もたやすくは買ふことが出来ませんでした。ところが、都合のいゝことに、先生の出入してゐた本屋の主人は先生の勉強

好きに感心して、先生が讀みたがつてゐる本は、「本をよごさずにきれいにしておいて下さればよろしいから、どんな本でも持つて行つて讀みなさい。」と言つて親切にも貸してくれたのでした。先生は非常に喜んでいろいろな本を借りて來ては勉強されました。

或時その本屋の主人の妻が病氣になりました。なかなかの重い病氣なので、色々な醫者に見せましたが、醫者は、「とても助かる見こみはありません。」と言つて歸つてしまふのです。これを聞いた先生は、「私の手で出来るだけのことをして見ませう。」かう言つて、それから勉強がすむと何時でも來て、病人の世話を

しました。その熱心な真心が通じたものか、あの悪い病氣がすつかりなほつてしまひました。

本屋一家の喜びはどんなだつたでせう。先生に厚くお禮を言ひながらたくさんのお金を出しました。すると先生は、「私はあなたからいつも色々な書物をかしていただいて御恩になつてゐます、今度やつと少しばかり御恩返しをすることが出来ました。ですからこのお禮はいりません。」と言つてどうしても受け取りません。本屋の主人は、「でも何かお禮のしるしをあげなければ私たちの氣がすみません。どうか何なりとあなたの好きなものを言つて下さい。」としき

りに言ひますので先生は、「それほど言はれるのならあの岳飛の石摺の額を一枚もらひませう。」と言つてもらつて歸りました。

岳飛と言へば日本の楠木正成のやうな支那の忠臣ですが、その人が書いた字を石にほつたものをうつして額にしたものです。ふつうの人だつたら少しも有難くないやうなものでした。

八、乞食ゴジキのお醫者イシヤ

大阪ノ
テシマ橋下

ムレ居ルコジキ。
シカモ病ヤトヒニ
泣キウメク。
夜ハフケテ、
月カゲアハク
風サヘサムシ。
病ヤムコジキラノ
待ツハタレ。
年若ク、



書生スガタノ

左内先生。

藥ヲアタヘ

ミヤクヲミル。

コジキラノ

涙流シテ

喜ブ顔ニ、

又次ノ日モ

橋ノ下。



夜オソク

カヘル日ツツク。

アヤシイコトト

一人ノ友ガ

アトツケタ。

橋下ノ

コノ有様ニ、

オノレチハヂヌ。

人ノナサケノ

美シサ。

九、お醫者の大中小

先生のお家は先祖代々お醫者が仕事でありましたから、自分もやがて醫者になるために醫者の學問も勉強されましたが、心の中では天下を呑んで、日本のお國につくすやうな偉い人になることを考へてをられました。先生はおしやべりすることはあまり好きではありませんでしたから、必要のない時はだまつてゐましたが、一たび口を開けば、いつも日本のお國で一番大切なことがらを人に話しては皆をびつくりさせました。そしてよく次のやうなことを言つて居られました。

た。

「醫者の中には小醫もあれば中醫もあり、又大醫もある。小醫は主に人の病氣をなほす醫者のことで、中醫とはその小醫を教へる人だ。しかし大醫といふのは小醫や中醫のやうに一人や二人を相手にして病氣をなほすのではなくて、お國全體の悪いところをなほす人なのだ。僕は、大醫になりたいと思ふ。」

先生の考へて居られた大醫といふのは、今の總理大臣のやうな人ではなかつたでせうか。そしてこの日本全體を立派な立派なお國にされたかつたにちがひありません。先生の居られた頃は、日本は外國にくら

べてずつとおくれた力のない國だとよその國々から思はれてゐましたからね。

十、先生の御兄弟

先生が二十二歳の時、私たちが住む越前福井の殿様の松平春嶽公より、學問が進んだといふのでおほめの言葉と共に御褒美に印籠を下さつた。先生はその頃お父さんもなくなつたし、もつとく勉強する爲に大阪よりも一そうのこと江戸へ行つて勉強しようと決心されて、江戸で、一心に勉強を續けて居られたのである。

間もなく越前へ歸つて来るやうにとの知らせに、急いで歸ると、殿様から今迄のお醫者の仕事を止めさせられて、御書院番といふ重い役目に取りたてられることになつたのである。昔は今とちがつてお醫者は身分が低くて武士仲間では一番下だつたから、今度はとてももの出世だつた。ところが、歸つて來てそのことをお母さんに話すとお母さんは大へん先生を叱つて申された。「この橋本家は先祖代々醫者の家からです。勝手に仕事をかへては祖先の方々に申し譯ありません。それだのにお前はお醫者から武士に引立てられた時、どうしてお断りをしなかつたのです。」

さすがの先生もお母さんの真心こもつたおさとしのきびしさに、自分も涙を流しながら、「勝手にお引受して大へん悪うございました。實は殿様に今迄大へん御恩になつてゐますので、どうしてもお断りするとは出来ませんでした。ですからお醫者の仕事は私の代りに弟につがせて下さい。」お母さんはその言葉を聞いてどうやら安心されたやうだつた。

先生は重ねて弟の綱維さんに、「綱維、お前兄さんの言ふことを聞いてくれるだらうね。」綱維さんは氣の毒さうに、「兄さん、私は大きな船に乗つて世界中を駆けめぐつて、日本の國威を輝かす船乗になりたいたいと思

ふんですけれど。」

「さうか。それでは綱常、お前たのむぞ。どうだ。お前もこれから先うんと勉強してお父さんに負けない立派な醫者になつてもらはねばならんが、どんな風に勉強するつもりだい。」

「はい、私はたゞ一生けんめいに勉強しようと思ひます。その他にはなにもありません。」

「お、さうか。よく言つてくれた。しつかりやれよ。綱維も綱常も、そして私も、兄弟皆が力の續く限りうんと勉強して、立派な人になり、お國の爲につくさうね。」一つのお部屋に四人が手を取りあつて涙にくれた

のであつた。

この時先生は二十二、綱維さんは十六、綱常さんは十一だつた。綱維さんは長生きせずになくなられたが、一番末の弟の綱常さんは先生との約束を守つて、とうとう醫學博士になり、赤十字社長やその他立派な仕事をされて、お醫者の方で日本のお國につくされたのだつた。

十一、二十六年の一生

かうして若い中にうんと勉強されたかひがあつて、先生はその學んだ學問で身を立て、ますます重く用ひ

られて、とうとう春嶽公のお側役に取り立てられて立

派な働きをされた。

二十三歳の時に、越前藩のたつた一つの學校明道館の館長になつて、お父さんくらゐに年をとつた他の先生たちと一緒に、御自分と同じくらゐの年の生徒を教へられたり、又翌年には江戸へ行つて、春嶽公の先生となつて書

物を教へられたり、又その他のことと色々とお國のた



めにつくされた。しかしあまり働き過ぎて、その頃考のまらがつてゐた幕府の悪い役人たちにきらはれ、とう／＼とらへられて殺されてしまはれた。その時のお年は二十六歳、もつと長く生きて居られたら、どれだけお國のためにつくされたか知れない。本當におしいことだつた。私たちはこの先生をお手本に先生のやうなりつばな人になつて、お國のためにうんと働かうではないか。

十二、先生のお墓

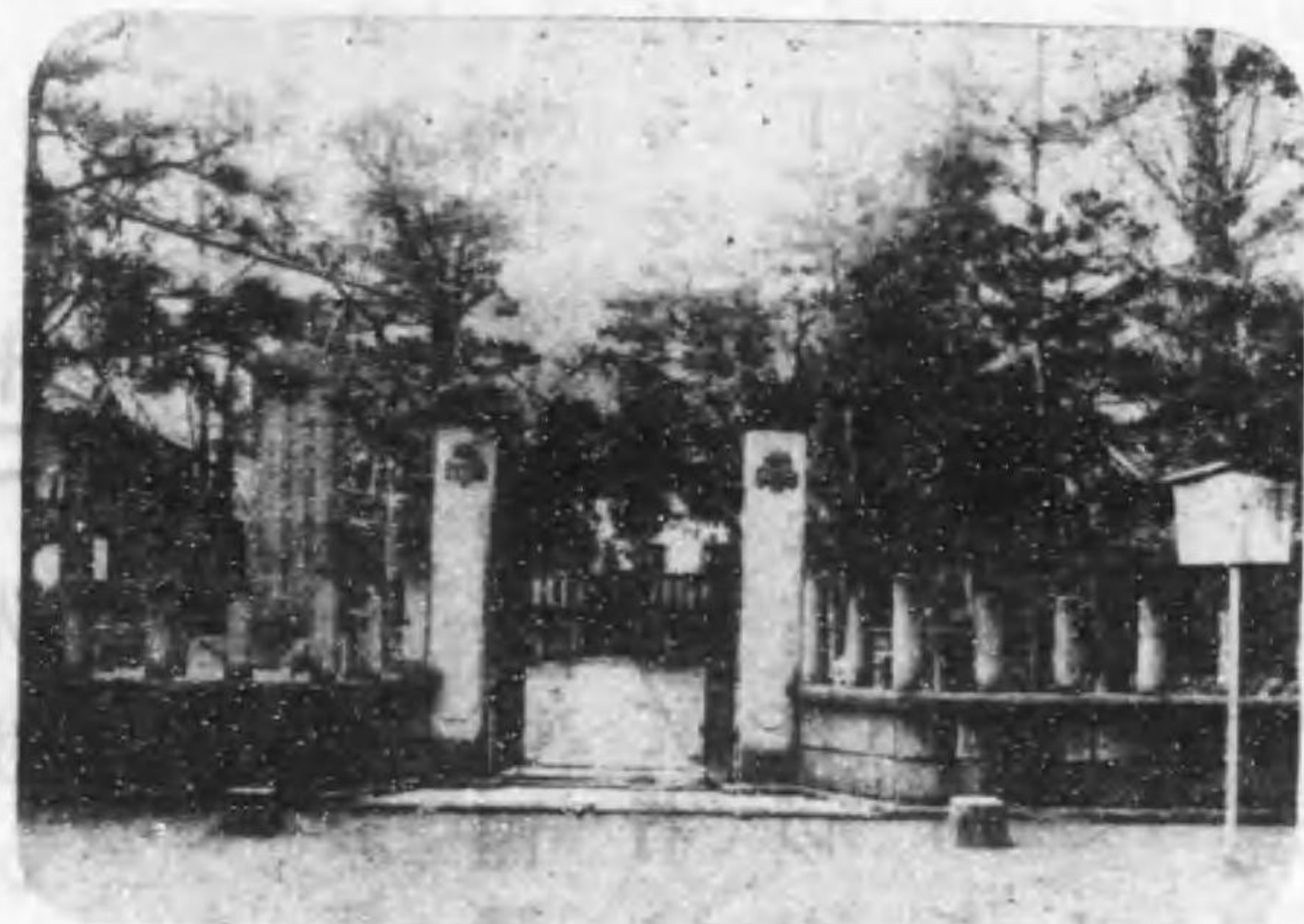
昨日はお天氣がよかつたので、學校がすんでから姉さんと左内先生のお墓へお参りに行つてきました。

幸橋を過ぎた頃、團體旅行の一團らしい人たちが私たちを追ひこして行き、「橋本左内先生の墓是より西二丁」と書いた石柱のたつてゐる道へ吸ひこまれるやうにまがつてはいつて行きました。私たちも急ぎ足でその人たちの後へついて行きました。

しばらく行くと足羽校がそびえたつてゐるのが見え、目の前には小さな橋がかゝつてゐます。見ると左

内橋と書いてあります。

姉さんのお話では私の歩いて来た今の町はやはり左内町で、又この近所に左内湯と名前をつけた湯屋まであるさうです。左内先生のお名前をしたつて色々なものにつけられてゐるのを聞いたり見たりして、一層先生のおえらさを思ひました。



いよゝゝお墓の前に着いた頃、後から一人のひげの生えたをちさんがかけてき

ました。このをちさんは、いつもお墓のお世話をして下さるのださうです。その人が正門のとびらをあけて親切に私たちを中へ入れて下さいました。そして皆で一緒にお禮をした後でお墓について説明をして下さいましたが、それによると、まん中が先生のお墓、右がお父さん、その右が御先祖、又先生のお墓の左がお母さん、そして一番左の平たい墓石が先祖代々のお名前を書きあらはしたものださうです。どのお墓にもきれいにお花が上げられてゐました。

をちさんのお話によると、先生のなきがらはすぐ先生のお友達によつて江戸の回向院といふお寺にとむ

らはれてそこにお墓がたてられました。後で先生は罪をゆるされ、お家の人々が福井の菩提寺である善慶寺に、なきがらと一緒に、お墓を立てられたのが私たちの目の前にある。このお墓のなさうで、今では先生のお墓は東京と福井との二つになつたのなさうです。

少し手前の方へもどると、大きな石碑が立つてゐて、そこに字が書いてあります。それは先生の眞心を詩に書いて、友だちの長谷部といふ人に送つたのを引のばして石にはつたのだといふことで、その詩のわけは、「昔支那の忠義な家來に顔常山とか張侍中とかいふ人がゐて立派な行をして死んで行つたが、日本は今と

てもあぶない時で、油断をしたらどんなことになるかわからない。こんな世の中だから自分も生きてゐる間に忠義な家來となつてお國の爲につくし、死んでからは立派な人だといつて人々から指折りかぞへられるやうな人にならう。」といふのなさうです。先生の「かたい決心がうかがはれてます。敬ふ氣持になりました。」

ふと氣がつくと、境内の中も外もとてもきれいで塵はあまり見かけません。姉さんのお話では、足羽校の生徒さんがたえず氣をつけてきれいにしてくれてゐるのなさうです。こんなりつばなお墓の側で勉強し

てゐる足羽校の生徒さんたちは本當にしあはせだとうらやましくなつて來ました。

高 學 年 用

一、常磐の井戸

天保五年の春三月

そよ風柳を渡るころ

呱呱の聲あげられし

處は、福井の常磐町、

あゝ、橋本左内先生。

幕末ゆらぐ世の中に

時の名君春嶽公

仕へて天下に名も高き

越前藩の大偉人

あゝ、橋本左内先生。



君逝きまして八十年
尊皇愛國盡忠の
倒れて後已む大和魂
常磐の井戸の香も高き、
あゝ、橋本左内内生。

二、啓發錄

神童、左内先生の面目が、最もよく表れてゐるのは啓發錄である。
幼い頃から勉學され、理想に燃えられた先生は、師、吉田東篁の教を受
けられて益々感激され、遂にやみがたい熱血が腸からほどばしつて
出たものが、此の啓發錄である。

十五歳の少年が、大人も及ばない豊富な言葉と思想を以て、天下を
論じ古今を説き、世人をいましめられた大文章は、一體如何なるもの

であらう。

先づ、啓發錄は、その終りに、「以上五目少年學ニ入ルノ門戸トコ、
ロエ書ツラネ申候。」とあるやうに、自らの信條として自分をはげま
す爲に書かれたものである。

全部で五目あつて、一目毎に説明が加へられてゐる。

第一は「稚心ヲ去レ。」といふことである。

果物の熟さないものはいけないやうに、人間もわらべしい心をと
らねばならない。十三四歳にもなつて學問に志した者が、此の青臭
い心を毛すぢ程でも持つてゐては、とても天下の豪傑にはなれない。
昔、十二三歳で父母に別れて初陣に功名を立てた人もあるが、此等は
皆稚心がない爲である。だから稚心を去るのが武士道に入る第一
歩であるといはれてゐる。

第二は「振氣。」といふことである。

之は負けじ魂とか恥を残念に思ふ意氣張を振り起さねばならぬ

とかといふことで、當時の武士が兩刀を帯びながら、士風がおとろへてゐたのをなげかれたのである。

平生安樂に暮して行くことの出来るのは、高大な君恩のおかげである。

だから一生の中に、骨身をくだいて露の忠義の心をゆるめないうやうにするには、士氣を振り起さなければならぬといふことである。

第三には「立志」

志を立てるといふことは、君の爲、國の爲に大業を起し、親の名まで



も揚げようとする事である。此の志の無い者は、魂の無い虫と同様であつて、昔のすぐれた人も目四つ口二つあつたわけがなく、皆其の志が大きく強かつたからである。

志を立てる近道は、書物の中に感心した所があつたら、書抜きはり抜いて、いつも努力しなければならぬといはれてゐる。先生の大きな志がこれで分るであらう。

第四に「勉學」

志が立つても、之を育て、行くには、勉學せねばならないと説かれ、學問といふのは、忠義孝行な事を見たら自分もその忠義孝行に負けないやうにつとめて行くのにあるといはれた、詩文讀書をするのでなく、忠義な行をするために學ぶのであると言つて居られる。先生の偉い所が此處にも見られるのである。

第五は「交友ヲ擇べ」

すべて友達には損友と益友とがある。損友には自分が出来るだけ世話をして正しくみちびいてやり、益友には自分から親しみを求め、常に兄弟のやうにして、手本としなければならぬと言つて居られる。

なほ、此の五目の終りに、「何トゾシテ吾身ヲ立テ、父母ノ名ヲアラハシ、行々君ノ御用ニモ立ち、祖先ノ遺烈ヲ世ニカマヤカシタイ。」とのべられてある。びちくした先生の心がどつてゐるやうである。

三、適塾の生活

遠大な志を持たれた先生は、何時までも福井のやうな片田舎かたがさに居ては、井戸の中の蛙だと思はれて、嘉永二年十六歳の秋、父の許しを受けられて北國路を上り、大阪に行かれて、當時オランダ醫學で天下に

有名な緒方洪庵のお弟子になられた。

洪庵先生の塾は適々齋塾あてあて又は適塾あてあてといつて、全国から多くの秀才しゅうさいが集つて學問を習はれた所だ。その中でも、先生は最年少であつたのである。先生は女子のやうなやさしい、おとなしい顔であられたから、始めは田舎出の小僧として、馬鹿にされ、なぶられたであらうが、負けじ魂の先生は一生けんめい勉強され、ずん／＼上達して遂に年上の者を追ひ越され、一月々々進級されたので、だん／＼仲間の者から尊敬せられ、おそれられて來たのである。師の洪庵も、「彼は必ず我が塾名を揚げるだらう。恐るべき人物である。」と褒めたゝへた。これは當時の話である。入塾以來、まだ一度も夜間外出をされたことがない先生が、夜おそく歸られることが度重つたので、友達は、橋本が夜遊びを始めた。」などといふうはさを立てた。そこで心配した渡邊といふ塾生が、どこへ行くのか見ようと後をつけた。ずんず

ん行つて橋のたもとまで来たところが、先生は橋の下へ行かれた。渡邊も後を追つた。ところが意外にも、其處は乞食の小屋であつた。渡邊はびつくりして飛んで歸つたといふことである。先生はそこで乞食の診察をされ、お産の手傳までもされたのであつた。それを知つた一同は、非常に恥ぢ入つたといふ。

このやうに熱心にしかも好い成績で勉強されたので、藩主松平春嶽公は大へん褒められて多くのお金を送られたのである。

四、名醫ぶり

緒方洪庵塾で學理と實際を熱心に勉強して居られた先生は、嘉永四年の暮十二月、父の長綱様が病氣にかゝられたので、急いで福井へ歸られる事になつた。親を思ふ孝行な先生は、病父の枕許で看病をされると共に、父に代つて患者の診察までもなされた。

一心に診察して居られた先生は、或時お父さんの面前で或病人の大手術をされたので、お父さんはそれを御覽になり、先生の立派な腕前に驚かれ、又お喜びになられた。先生のお喜びもまたどんなであつたであらう。

看護の効もなくお父さんがなくなられた。その後を先生はおつきになつて藩醫になられた。或時一人の脚をわづらつた老人が先生の宅を訪れた。先生はそれを見られて、「これはお年のせりでありまして、全快はむつかしいと思ひます。丁度大根のしなびたものがもう元にかへらないやうなものです。」といはれたが、その落着いた態度と、ていねいな言葉づかひは、とても二十歳にもならない青年とは見えなかつたさうである。

この老人は先生の言はれる通り、とう／＼回復しなかつたが、家の者が、「ほかの醫者にみてもらつてはどうです。」とすゝめても、「左

内さんにかかつて死ねば本望だ。」といつて承知しなかつたさうである。

今、命を落すやうな危い時機に、よく先生の言葉を信用して、遂に外の者の言葉を聞かなかつた老人も中々見上げた者であるが、これ程まで心服せしめられた先生の診察ぶりはより以上に立派なものである。

五、江戸遊學

先生がいつも言つて居られたことに、「醫者には小醫があり、中醫があり、大醫がある。小醫は人の病をなほし、中醫は小醫の先生となつて教へるが、大醫は大變違つてゐる。中小は人間の病體をなほすけれども、大は天下國家の病根をなほす。自分は必ず大醫にならないければならない。」といふ事がある。先生の大きな志がこゝにも表

れてゐる。

時は幕末、嘉永の六年に、アメリカのペリーが黒船をひきつれて我が國に通商を求め、きかなければ何とか考へがあると言つたので、國内は大騒ぎとなつた。世界の氣勢をよく知つて居られた先生は、じつとして居たまらず、江戸へ行つて勉強される事になつたのである。

江戸に出られた先生は、始め蘭學家の坪井信良ひらゐのしんりやうについて學ばれたが、信良よりも先生の方が適塾で勉強せられただけあつて、かへつて勝れて居られたので、信良は、「これはとても自分なんか及ばない。」といつて杉田成卿すぎたなるけいの門に入らしめたといふことである。杉田成卿といへば、之また天下に有名な蘭學の大家で、江戸第一の大學者であつた。始め、成卿は一冊のむつかしい本を授けたが、先生は一月で讀んでしまはれた。そこで成卿が本の中の事を問ふた所が、すらくと立板に水を流すやうであつたので、成卿も感心してしまつた。そ

の時先生はまた一冊の本を著かされた。又漢學を大先生塩谷岩陰しほのいわいんに學ばれ、藤田東湖、佐久間象山、安井息軒等天下の名士と交られ、國事の議論をなされた。

ところが七月に、福井に大火があつて先生の家も焼けてしまつた。そこで親類の人が相談をして、先生を呼びもどさうとしたが、お母さんはひどく反對されて、「たとへ苦しくとも修業を續けるやうに。」と主張されたのでそのまゝになつた。先生は藩公から金七十兩をお受けになられたが、家を建て直す費用にとお母さんに送られたさうである。

安政二年、福井に一度歸られた先生は、すぐまた江戸に行かれ、常磐橋の藩邸に入られた。此の頃、あの有名な維新の大傑西郷隆盛と面會されたのである。ところが先生の顔色が白く女のやうであつたので、隆盛はなぶつて知らぬ顔して庭の角力を見てゐた。先生はよ

く辛抱しんぱうされて、次々と話されて行く中に西郷も先生の偉いのに驚き、翌朝すぐ昨日の無禮を謝したのである。

あふ人毎に西郷は、「自分は先輩では藤田東湖、同輩では橋本左内、此の二人にはとても及ばない。」と語つたのである。又武田(伊賀守)耕雲齋といふ人は先生の事を、「東湖の死後又東湖を得たり。」といつてゐる。

これによつて考へて見れば、先生はどれ程すぐれておいでになつたかが分るであらう。後、今一度江戸に行かれ、之で江戸に行かれたのは三度であるが、此の江戸遊學こそ、實に先生が福井藩の俊才しゅんさいから天下の偉傑ゐがくになられたもとである。後年、政治家として大運動をなされたわけでもある。

六、ゆらぐ世の中

徳川三代將軍家光が鎖國をしてから、我が國內は太平が打續いた。その長い平和の夢を打ち破つたのが、寛政四年松平定信が老中であつた時に、ロシアの船が北海道の根室に來て通商を求めた事であり、その後、英船が長崎にオランダ國旗をひるがへして入港した事である。當時の國民は、此等の船が亂暴を働いた爲に非常に怒り、今後外國の船が來た場合は追ひはらつてしまへと騒いだのである。又心ある人々は國防に注意し、或は海岸を廻つて海防を嚴にし、或は書物を著して天下の人達に説いたのである。

しかし世界の氣勢はひし／＼と押寄せ、何時までも鎖國を許さないやうになつた。それは嘉永六年アメリカの軍艦四隻がペリー海軍少將指揮の下に我が浦賀に渡來した事である。幕府は江戸の鼻

先浦賀へ、見た事もない軍艦が黒煙をはき大砲を放つて威容を示したのだから驚いたのも無理ではない。天下の人々もどうなる事かと心配して眠れなかつた程である。

幕府は、浦賀奉行に外交の事は長崎に行つて願ふがよいと言はせたがペリーは武力に訴へても上陸をすると主張したので、仕方なく久里濱に會見所を作つて國書を受け、返答は明年するといつて米艦を立ち去らせた。

此の大騒ぎの時に、天下を裁くものは十三代將軍家定であつた。家定は身體が弱く、とても此の大難局を切抜く人物ではなかつたのである。そこで幕府は老中を阿部正弘とし、天下の諸侯に意見を聞く事になつた。此れが一層世の中をにえくり返らせたわけである。

七、名君春嶽公

かうした幕末大騒ぎの時に、我が越前を治められた殿様は春嶽松平慶永公であつた。公は徳川三卿の一つである田安家に生れ、天保九年に福井三十二萬石の領主になられた。

越前藩は、當時藩政も振はず貧乏であつた。公は儉約を自分自らなされ、多くの藩民達に手本を示された。此れがもとて次第によくなつて來たのである。又色々新しい政治をしかれ、文武を奨励されたので、名聲は天下にとゞろくやうになつた。

嘉永六年の米艦渡來の時は、公は二十六歳の元氣盛であつた。公は外國關係については非常に心配され、水戸の徳川齊昭や幕府の老中阿部正弘等に對して手紙を送られたり、面談されたりして意見を述べられた。春嶽公の意見は當時の世論と同じやうに攘夷論であ

つた。例へば幕府に出された答書の中に、「明年の春、米艦が渡來した時には必ず戦争する覺悟で、今から用意する爲各藩は防戦術を勉強し、天下の人心を一定されるがよい。それには先づ大總督を立てて、その方におまかしなさるがよい。」とか、又、「講和の相談は一切止めて、今日たゞ今から必戦の決心をした事を發表し、大總督を立てられることが急務中の大急務である。」とか、「徳川一族の中で徳あり人望ある人を大總督に立て、一切をおまかしなさるやうに。」とある事によつて明らかであらう。つまり必戦を覺悟して攘夷を實行し、それが爲には大總督をこしらへる事が急務だといはれるのである。これは病弱な將軍家定では天下の人心をまとめる事が出來ないのを心配された爲である。

此の尊皇愛國の志の厚い公をお助けして國事に骨折られたのが、我が左内先生である。先生の政治家としての活動が始つたのもこ

こにある。あの啓發録の中に、「醫者といふいやしい仕事をしてゐるが、志は天下國家にあるのだ」と述べられてゐるその志が、とげられる事になつたのである。先生の得意こそどんなであつたであらう。こゝに公は名臣左内先生を得、先生は名君春嶽公を得て新日本の夜明けに大活躍をされる事になつたのである。

八、開港論

ペリー渡來の嘉永六年は暮れて、いよいよ約束の安政元年は迫つた。すると、明けて間もなく又も七隻の軍艦を引連れてペリーは江戸灣に入つたのである。幕府は驚いて騒いでゐる中に、彼は、「去年の返答をせよ。」と迫つた。幕府も仕方なく和親條約を結んでしまつた。下田、函館の二港を開き、三代將軍家光以來續けられた鎖國を破つたのである。

しかし國內の意見は、徳川齊昭を始め多くの人々は攘夷論であつた。幕府が朝廷のお許しを受けなくて條約を結んだ事を知るや、彼等は火をはくやうな勢で幕府に迫つた。そこで幕府も開國のやむを得ないと知りながら開國を決める事が出来ず、攘夷を實行する事が出来ないとなりながら攘夷のやうに見せかけた。

こゝに又、大問題が起つたのは米國總領事ハリスの來着である。ハリスは前の和親條約によつて我が國に來たのである。幕府は驚いてことはつたが、ハリスが強い態度で迫つたので許してしまつた。此の大事な時に、春嶽公は多くの大名達と會見され、幕府に意見書を出された。それは、「今度の事はやむを得ないが、今後英國も露國も同じやうに來るに違ひない。だから武備をきびしくして、數百年來太平になれた士氣を振るひ起さねばならない。かやうにしてこそ彼等の非望をくじいて、何時までも和親を續けられるであらう。」

といふのである。以前の攘夷論がこのやうにかはつたのは先生の意見によるのである。

先生はハリスが萬里の波をけつて堂々と我國に渡來し、諸大名を前にして將軍に面接するのを見られて、早く國を開いて彼のよい所をとり、我が美點をあらはしたいといふ意見であられた。「今後は鎖國の法を改め、世界萬國と取引し、仁義の道、忠孝の教は我が國が教へてやり、機械藝術は彼から學んだならばお互に利益であらう。」と、春嶽公は重ねて鎖國が出来ない事を幕府に申された。此の名臣と賢君が相共に開港論の先手の大將となつて、天下の人々を引きずつたのである。

先生は開港論からもう一步進んで日露同盟論を唱へられた。「今日世界の様子を見ると、我國は建國の理想たる八紘一宇の精神にのつとり世界平和に乗出さねばならぬ。それがためには我が國も滿

洲支那と手を取り英米にたよらず、眞に東亞新秩序の建設の盟主とならねばなるまい。」

かく考へかく觀じ、今の世の中にくらべた時、偉大であられた先生の一端が分るであらう。

九、將軍の世嗣

外國との問題の外に、當時大問題となつたのは將軍の世嗣問題である。嘉永六年ペリーが渡來してから間もなく、將軍家慶はなくなつて、その子家定が十三代の將軍になつた。家定は此の時三十歳の男盛りであつたが、病弱でとても國政をとる事は出来なかつた。平常ならばともかく、天下がゆらぐ此の世の中に立つては誠に心配であつたのである。

そこで春嶽公は誰かよい人を將軍の養嗣子君とし、相談相手とな

つて天下を治めさせようと考へられ、當時英明で世間に評判のよかつた一橋慶喜を立てようとなさつたのである。公は同志の大名に話され、老中阿部正弘にも打ち明けられた。

ところが阿部老中も死んでしまったので、公は先生を福井から呼び寄せられ、中根雪江と共に相談されたのである。先生は諸侯の間を往來されて猛烈な運動をなさつた。

先づ當時老中になつたばかりの松平伊賀守が、慶喜反對である事を知つて色々工夫し、とうとうその陣營に引入られ、城中の大奥にまで手をのばされたのである。

かやうにして、一生けんめい活躍せられたが、こゝに少しもゆだんが出来ないのは、年はまだ十三歳の幼年であるが、家定將軍から最も近い紀伊侯慶福を立てようとする運動である。その運動者の一人が井伊直弼である。

こゝに一人の將軍を廻つて天下の諸侯は二派に分れ、慶喜と慶福との一大決戦となつた。

時は安政五年である。老中堀田備中守は米國との通商條約の勅許を受けるため京都に上つた。幕府の勢が次第に衰へ、朝廷の御威光が盛になつて來た頃である。尊皇愛國の黨と佐幕黨とが入り亂れ、こゝに京都の町は上を下への大騒ぎとなつた。

先生も公の命令によつて桃井伊織(又は亮太郎)と名前を變へられて京都に行かれた。京都は初めてである。無論先生を知る人も少い。先生が開港論を唱へると、幕府のまはし者であると言ふ者があつた。先生の御苦心はどんなであつたであらう。しかし先生は滿身のちゑをしぼられ、ものすごい雄辯をふるはれて、生きるか死ぬかの大運動をなされたのである。

先生は初め京都へ行つて世界の大勢を説かれ、攘夷論を開港論に

しよう和努力なされたが、次第にそれよりも將軍の世嗣問題が先であると感じられた。その方に朝廷からお許しがあるやうに活動せられた。

近衛、三條兩公卿や青蓮院宮へ立入れ必死の運動がだん／＼よくなつて來た時に、又もや反對派が起り、全く前途が分らないやうになつてしまつた。

そこで先生は、約二ヶ月の苦心を後に残されて江戸に歸られた。江戸に歸られて又もや大問題が起つた。それは紀州黨の井伊直弼が大老となつた事である。直弼は勇氣があり思切りがよかつた。然しわがまゝであつた。

このやうにして慶喜黨はだん／＼旗色が悪くなつて來た。その中に次の將軍となる者が發表せられたのである。それは紀伊の慶福であつた。先生の數年にわたる大苦心も水のあわとなつてしま

つた。春嶽公はきんしんの身となられ、先生もとう／＼とらはれの身となられたのである。

十、秋深し傳馬町

安政五年十月、幕府の役人十數名が突然江戸の越前藩邸に入つて、先生の家をさがし始め、書物類をとり上げて行つた。その事があつた翌日、先生は親類の人と共に町奉行へ呼び出され、その親類の人にお預けの事となつたのである。

そこで先生は、暇になつたから讀書をしたり、詩を作つたりして居られた。しかし何時も先生の心に浮ぶものは春嶽公の事と、福井に居られるお母さんの事である。お母さんにはたび／＼手紙を送つてなぐさめてゐられたが、その中に公の罪を何とかしてはらしたいといふ真心が表れてゐて、假名交りのやさしい手紙の中に、君を思ふ

忠心と母を思ふ孝情とが織り出されて、讀む者に涙をしぼらせたのである。

かうして同年の十一月、町奉行所で第一回の裁きがあつた。それから次々とおたづねがあつたが、先生は公と共に國家の爲を思はれて、賢明な一橋慶喜を將軍に立てようとなされたのであるから、正々堂々とはつきり答へられて何等後暗い所はなかつた。

安政六年となつて七月、先生は京都での大運動の取調を受けられた。此の時も先生は臣下としての務を盡したまでであると言はれた。さうして十月二日、最後のおたづねがあつて、先生はとう／＼小傳馬町の牢屋に入れられたのである。

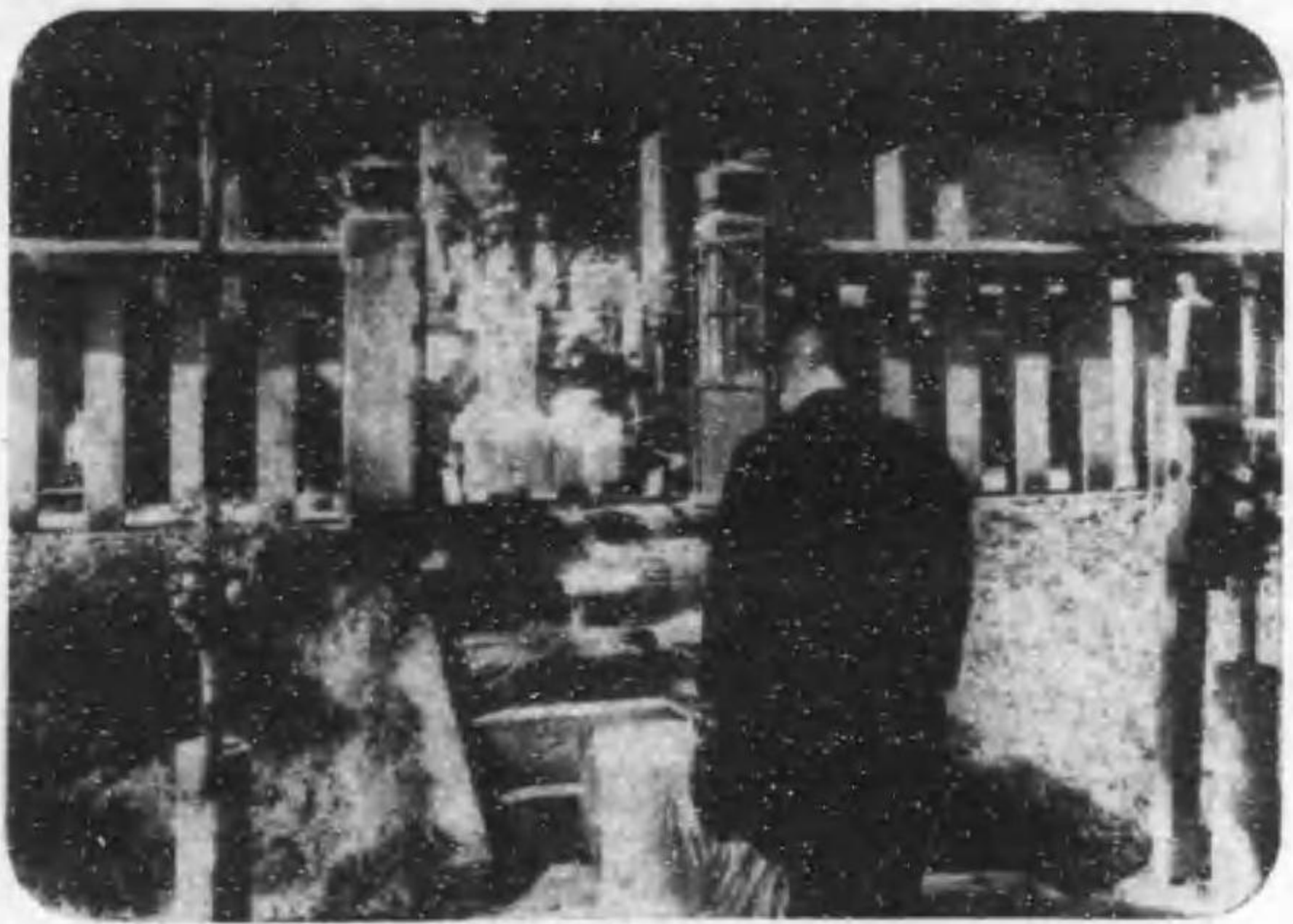
その時、多くの幕府の役人の意見は、特別罪もないが無罪とも出来ないで、遠い島流し位と決めてゐた。ところが幕府は死罪と決めてしまつた。役人さへも驚いたが、當時幕府に對してはどうする事

も出来なかつた爲に、このやうな重い罪になつてしまはれたのである。

十月七日の朝、先生は傳馬町の獄屋から評定所へ行かれた。そのかごが越前藩邸の門前を通る時、中に居られた先生は、藩公始め一同にお別れの爲おじぎをされたのである。その評定所で死罪の申渡しを受けられ、又もかごに乗せられて牢屋へ歸られたのである。

このやうにして秋は深い安政六年十月七日、處は江戸の小傳馬町の刑場が先生最後の日となつたのである。今の午前八時頃、先生は刑場へ行かれる爲、牢屋のとびらは開かれた。大方の者はもうオドオドとなつて顔色が變つてしまふ。先生はかねて覺悟の事であるから少しもあわてられず、藩公からたまはつた新衣を着て従容と死につかれた。役人はこの態度に驚いて、「お見事」と感心したのである。

十一、香煙立ち上る先生のお墓



死刑の當日、友人達は先生のなきがらをもらひ受けて棺に入れ、小塚原の回向院まがうけいんに埋葬して、初め橋本左内墓はしもえといふ石をたてたが幕府の役人の爲にこはされてしまった。そこで先生の別號である藜園かいらんをとつて「藜園墓」をたてた。

その後、井伊大老は櫻田門外で水戸の浪士の爲殺され、先生の罪もつけたので、文久三年小塚原から先生のお寺である福井市祐海町、つまり足羽校の南側に移したのである。これが先生の永遠に此處に眠られるわけである。明治になつてお墓は「景岳先生之墓」と改められたの

でもとの「藜園墓」は再び回向院に移されて、今もその通りになつてゐる。

此の先生のお墓を正面にして、右にお父さんのお墓、左にお母さんのお墓があり、右端には先祖のお墓、左端には家の系圖が書かれてある。大正十一年にはお墓所の手入れが行はれて、正面には玉垣が廻らされ、兩側には一對の常夜燈籠がおかれた。その上部には橋本家の定紋五七の桐が飾られ、右の方には「清光國を照す。」左の方には「忠魂は老せず死せず。」と當代の國士頭山滿先生の書になつてゐる。又大正十五年には先生の墓前に、絶筆となつた詩の大石碑が建てられた。今左の方に空高くそびえる仙臺石の大石碑がそれである。福井に旅をする人が、建武の中興に功があり後醍醐天皇の御爲に御盡し申した大忠臣新田義貞公をまつる藤島神社と、此の幕末勤皇の大忠臣橋本左内先生のお墓に参拜するのも尤もつともな事である。實

に毎日タクシーの止らない事はなく、香煙は空高く永遠に薫る事であらう。

十二、先生の國體觀

我が國は伊弉諾尊伊弉冉尊がお産みなされた國であつて、外國のやうに人があつて後相談し合つて造つた國とは全く違ふ。天照大神はそのお子様で、高天原にお出でになり、親神がお産みになつた此の大八洲の國を皇孫瓊々杵尊に治めさせられうとお思ひになつて、日向國の高千穂にお降り遊ばされたのである。それ以來、天照大神の御神勅にもあるやうに、我が國は大神の御子孫がお治めになり、永遠に一すぢの國がらである。これが三千年來續いて來たわけであり、世界のどの國よりもすぐれてゐるところなのである。であるから日本を神國といひ、天皇を現御神と申上げるのである。

先生はこの事をしつかりとつかんで居られた。それは安政三年江戸に居られた時に、中根雪江に送られた手紙によつて明らかである。「元來皇國は外の國と違ひ革命といつて力あり腕のある者が皇帝を滅して、自分が皇帝につくやうな事は全くない。」といはれ、今日八紘一字の精神を以て、世界の平和につくすといふ事が日本の目あてになつてゐるが、先生は九十年の昔にその事を言つておいでになる。「現在とても神武天皇のお考へをお守りしなければならぬ。神武天皇のお考へと申すのは國民が忠義を重んじ、武士が武道をたつとぶ事である。これが我が國の方針であつて、皇國の皇國たるところである。支那も西洋も之にくらべたならば、雪と墨との違ひがある。」と。誠に外國がよいと思ふ人は昔からたくさんあつたのであるが、先生のこの意見を聞いたならばどんなに痛い事であらう。又我が國が時に盛になり時におとろへた事もあるが、これは皆武道

が盛になつてゐたかおとろへたかによつてゐるのである。武道こそ、國を盛にする基である。決して支那のまねをしたり、オランダのまねをする必要はない。」と。青少年學徒にお下しになつたお勅語の中に、「文ヲ修メ武ヲ練リ。」と仰せられてあるが、先生のお考へがどんなにすぐれてゐたか、これによつても分るであらう。

十三、先生の詩

先生は小さい時から、詩を讀まれる事がお好きであつた。十三四歳の時にはもう詩を作られて友達の矢鳥立軒などにお示しになられた。これが先生に和歌が殆どなく詩が多いわけである。

さうしてりつばな詩の多いわけは、先生が外の人が作つた詩の中でこれはよい詩であると思はれると、それを切抜いて壁や机にはつておかれたからである。もはや十五歳の時に詩を作られ、次のやう

なのが残つてゐるが、十五歳の少年としては非常にすぐれてゐる事に氣づくであらう。

秋日山居

木石と居り鹿豕と遊ぶ 夜は破屋に眠り晝は山頭
輕裘肥馬王侯の貴きも 若かず此の身却て自由なるに

此の詩のわけは、「自分は或秋のよい日、山に行つて木を眺め石を見て、鹿や豚と遊んだ。このやうに晩はみすぼらしい家に眠り、晝は山へ行つて遊んでゐる。王様が暖い革の衣を着たり、よい馬に乗つたりして遊んでゐるが、自分のやうに山へ行つたり、野原へ行つたりして自由に遊べないから、自分の方がすぐれてゐる。」といふ事である。又傳馬町の牢屋に居られた時に作られた詩にかういふのがある。

獄中の作

二十六年夢のうちに過ぐ 平昔を顧思すれば感ますく多し

天祥の大節かつて心くたく 土室なほ吟ず正氣の歌

これは、二十六年は夢のうち過ぎ去つてしまつた。過ぎ去つた事を思ふと、誠に感じが深いものである。今獄につながれの身となつてゐるが、そつと支那の忠臣天文祥の最後までやり通す精神をしたはしく思ふ。彼は自分の國家のために最後まで戦つて破れ、とうとうつながれの身となつたが少しも意氣おとろへず、牢屋の中で高らかに正氣の歌といふ詩を歌つてゐた。自分もあの高い精神を學びたいと思ふ。」といふのであつて、小さい時からの負けじ魂があふれてゐる。天文祥の事を思ひ出されて聲高く歌はれてゐる先生の様子が思ひ出されるであらう。

次に先生の墓前の南側に大空高く立つてゐる仙臺石の大石碑がある。此の石碑には先生が死刑の前年に友達の長谷部恕連に送られた絶筆の詩が刻まれてゐる。

常山の髮

侍中の血

日月光を韜み

山河色を改む

生きては名臣となり

死しては列星とならん

これは昔支那の唐時代に、顔真卿の弟の杲卿といふ人があつた。常山の殿様であつた時、賊の安祿山を征伐したが、かへつて捕へられたので祿山をのゝしつてやまなかつた。祿山は怒つて杲卿を柱にくくりつけ、顔の肉をえぐつたがまだのゝしるので、舌をぬいてしまつた。舌をぬかれた杲卿はとう／＼死んでしまつた。後その髮を妻に送つたが、生きてゐるやうに動いたといふ事である。又西晋の時代に嵇紹といふ家來が惠帝に従つて軍に出たが負けたので身を以てお守りした。しかしとう／＼殺されてしまつた。その血が皇帝の御衣にかゝつたので後から或家來が洗はうとしたが皇帝は嵇紹の忠義をほめられて、洗はれなかつたのである。今此のやうに世の中は大騒ぎをしてお日様やお月様がかくれて暗いやうであり、山や

河も色が變つて國にいつどんな事が起きるかも分らない。しかし我々の腹はきまつてゐる。あの杲卿や嵇紹のやうに自分を投げすてて働き生きてはりつばな家來となり、死んで天の星の如くなつていつまでも我が御國をお守り申さう。」といふのであつて、先生の活躍を思つたならば、なる程とうなづかれるものがあるであらう。

十四、春嶽公の歌

公と先生とは、藩公と藩臣との間柄のみならず公あつて先生あり、先生あつて公がある關係であつた。であるから先生は最後まで藩公を忘れずその御恩の厚いのに感泣された。公も先生がなくなつて後、いつも先生の事を思ひ出して居られたのである。

明治十七年に小塚原に先生の記念碑をたて、翌年十一月、東京で建碑報告祭が行はれた。その時公も行かれて弔詞をのべられ、最後に

和歌をお供へになつた。

國のためつくす功いさをのあらはれて

御代の光を仰ぐけふかな

先生の國につくされた忠誠が天聽に達し、記念碑をたてるため、御下賜金を頂くことになり、その石碑も出来上つてお祀まつりりをする事になつた。先生も地下にをられてどんなに今日のこの光榮をお喜び下さつてゐる事であらうといふわけである。又

皇國の御爲みためにつくす功いさをは

千代も朽くもせぬこれの石碑いじ

すてがたき命をすてし君が名は

此明らけき御代にしらるゝ

とも歌はれてゐる。説明するまでもなく、先生が命をなげ出して、君國の爲に働かれた偉大なてがらをお褒めになつてよまれたのであ

る。

明治二十一年十月七日の命日に、三十年祭が行はれた。この時も公は

こまつるぎ三十年を過ぎし面影を

目の前に見るこゝ地こそすれ

と歌はれてゐる。何十年立つても、いつも先生の事が目の前に思ひ出されてどんなに感じがせまられた事であらう。

十五、時局に思ふ

當時、天下第一流の人物であつた藤田東湖、西郷隆盛、武田耕雲齋等がほめたゝへたやうに、先生は天下第一の人物であつた。身長は五尺ばかり、顔は白く、婦人のやうであつたが、口許はしまつて大へん尊い凜とした顔であられた。しかも平生は物を言はれないが、一度言

はれたならば、物すごい雄辯を以て人を説きつけ、そばにゐる人はそのため寒さを感じたといはれてゐる。

りつばな醫者であり、蘭學者であり、漢學者であり、その外多くの學問に通じて居られた。さうして高い所から全體を眺められ、いつも日本の國の事を思はれて、雄大な開港論を唱へられ、明道館といふ學校をお改めになる等、誠に何をされても出来ないといふ事はなかつたのである。外務大臣になられても、文部大臣になられても、總理大臣になられても、りつばにお働きなされたであらう。

今、我が國が平和な世界の建設につき進んでゐる時、思ひ出されるのは先生の事である。幕末大騒ぎの時にしつかりと我が國體のすぐれてゐる事をつかまれ、堂々と外國と交際して互に手を取り合ひ、特にアジャは一體となつて行かねばならぬ事を言はれた先生。實に何ともいへないお方であられた。

殊に、君のため國のために江戸へ行かれ、京都へ上られて白刃びやくの下に活躍せられ、とう／＼命をなくされてしまはれた。言ふ者は多いが行ふ者は少い今の世の中に、先生のやうに倒れるまでやる心で國の爲につくしたならば、新體制も立ち所に出来上り、一億國民がそれぞれの立場で、忠義をつくす事が出来よう。手本となるのは先生のお考へであり、身を以てお示しになつた忠義の道である。今むつかしい世の中に、私達は先生を手本として、自分の爲よりも國の爲に働き、天子様に御奉公出来るやうにならなければならぬ。

附 録

啓發錄

去稚心

稚心トハ、ヲサナ心ト云事ニテ、俗ニイフワラベシキコト也、菓菜ノ類ノイマダ熟セザルヲモ稚トイフ、稚トハスベテ水クサキ處アリテ物ノ熟シテ旨キ味ノナキヲ申也、何ニヨラズ稚トイフコトヲ離レヌ間ハ、物ノ成リ揚ル事ナキナリ、人ニ在テハ竹馬紙鳶打毬ノ遊ビヲ好ミ、或ハ石ヲ投ゲ蟲ヲ捕フヲ樂ミ、或ハ糖菓蔬菜甘旨ノ食物ヲ貪リ怠惰安佚ニ耽リ父母ノ目ヲ竊ミ藝業職務ヲ懈リ或ハ父母ニヨリカ、ル心ヲ起シ或ハ父兄ノ嚴ヲ憚リテ兎角母ノ膝下ニ近ツキ隠ル、事ヲ欲スル類ヒ皆幼童ノ水クサキ心ヨリ起ルコトニシテ幼童ノ間ハ強テ責ルニ足ラネドモ、十三四ニモ成リ學問ニ志シ候上ニテ此心毛ホドニテモ残り有之時ハ何事モ上達致サズ、迨モ天下ノ大豪傑ト成ル事ハ叶ハヌ物ニテ候、源平ノコロ并ニ元龜天正ノ間マデハ隨分十二三歳ニテ母ニ訣レ父ニ暇乞シテ初陣ナド致シ、手柄功名ヲ顯シ候人物モ有之候、此等ハミナ稚心ナキ故ナリ、モシ稚心

アラバ親ノ臂ノ下ヨリ一寸モ離レ候事ハ相成申間敷、マシテ手柄功名ノ立ツベキヨシハコレナキ義ナリ。且又稚心ノ害アル譯ハ稚心除カヌ時ハ士氣振ハヌモノニテイツマデモ腰拔士ニナリ居リ候モノニテ候。故ニ余稚心ヲ去ルヲ以テ士ノ道ニ入ル始ト存候ナリ。

振氣

氣トハ、人ニ負ヌ心立アリテ耻辱ノコトヲ無念ニ思フ處ヨリ起ル意氣張ノ事也。振トハ、折角自分ト心ヲトメテ振立振起シ心ノナマリ油斷セヌ様ニ致ス義ナリ。此氣ハ生アル者ニハミナル者ニテ禽獸ニサヘコレアリテ禽獸ニテモ甚シク氣ノ立タル時ハ人ヲ害シ人ヲ苦シムルコトアリ、マシテ人ニ於テヲヤ。人ノ中ニテモ士ハ一番此氣強ク有之故世俗ニコレヲ士氣ト唱ヘイカホド年若ナ者ニテモ兩刀ヲ帶シタル者ニ不禮ヲ不致ハ此士氣ニ畏レ候事ニテ、其人ノ武藝ヤ力量ヤ位職ノミニ畏レ候ニテハコレナシ、然ル處太平久敷打續、士風柔弱佞媚ニ陥リ武門ニ生レナガラ武道ヲ忘却致シ位ヲ望ミ女色ヲ好ミ利ニ走り勢ニ附ク事ノミニフケリ候處ヨリ、右ノ人ニ負ケヌ耻辱ノコトハ堪ヘヌト申ス雄々シキ丈夫ノ心クダ

ケナマリテ腰ニコソ兩刀ヲ帶スレ、太物包ヲカヅキタル商人、樽ヲ荷ヒタル樽ヒロヒヨリモオトリテ纒ニ雷ノ聲ヲ聞キ犬ノ吠ユルヲ聞テモ御歩スル事トハ成ニケリ。偕々可嘆之至ニコソ、シカルニ今ノ世ニモ猶未ダ士ヲ貴ビ町人百姓杯御士様ト申唱ルハ全ク士ノ士タル處ヲ貴ビ候ニテハ無之我

君ノ御威光ニ畏服致シ居候故無據貌ノミヲ敬ヒ候コトナリ。其證據ハムカシノ士ハ平世ハ鋤鎌持土クジリ致シ居候得共、不斷ニ耻辱ヲ知リ人ノ下ニ屈セズ心逞シキ者ユヘマサカ事有ルトキハ吾大御帝或ハ將軍家杯ヨリ募リ召寄セラレ候ヘバ、忽チ鋤鎌打擲テ物具ヲ帶シテ千百人ノ長トナリ。虎ノ如ク狼ノ如キ軍兵ハラヲ指揮シテ臂ノ指ヲ使フゴトク致シ、事成レバ芳名ヲ青史ニ垂レ、事敗ルレバ屍ヲ原野ニ暴シ、富貴利達死生患難ヲ以テ其心ヲカヘ申サヌ大勇猛大剛強ノ處有之ユエ人々其心ニ感ジ其義勇ニ畏候ヘドモ、今ノ士ハ勇ハナシ義ハ薄シ謀略ハ足ラズ、連モ千兵萬馬ノ中ニ切り入り縦横無碍ニ駆廻ル事ハカナフマジ、況ンヤ帷幄ノ内ニ在テ運籌決勝之大勳ハ望ムベキ所ニアラズ、サスレバ若シ腰ノ兩刀

ヲ奪ヒ取候ヘバ其心立其分別盡ク町人百姓ノ上ニハ出申マジ、百姓ハ平世骨折ヲ致シ居、町人ハ常ニ職業渡世ニ心ヲ用ヒ居候ユヘ、今若シ天下ニ事アラバ手柄功名ハ却テ町人百姓ヨリ出テ、福島左衛門大夫片桐助作井伊直政本多忠勝等ガゴトキ者ハ士ヨリハ出申サマルベキカト思ハレ誠ニ嘆カハシク存ル、箇様ニ覺ノナキモノニ高祿重位ヲ被下平生安樂ニ被成置候ハ、儲々君恩ノホド申ス限リナキコト辭ニハ盡シガタシ、其御高恩ヲ蒙リナガラ不覺ノ士ノミニテマサカノトキニ、我君ノ耻辱ヲサセマシ候テハ返ス返ス恐入候次第ニテ實ニ寢テモ目モ合ハズ、喰テモ食ノ咽ニ通ルベキ筈ニアラズ、コトサラ我先祖ハ國家ヘ奉對聊ノ功モ可有之候得ドモ其後ノ代々ニ至リテハ皆々手柄ナシニ恩祿ニ浴シ居候義ニ候ヘバ吾々共聊ニテモ學問ノ筋心掛ケ忠義ノ片端モ小耳ニ挾ミ候上ハ何トゾ一生ノ中ニ粉骨碎身シテ露滴ホドニテモ御恩ニ報イ度事ニテ候。此忠義ノ心ヲ撓マサズ引立後還リ致サヌ様ニ致候ハ全ク右ノ士氣ヲ引立振起シ人ノ下ニ安ゼヌト申ス事ヲ忘レヌコト肝要ニ候、乍去只此氣ノ振立候而已ニテ志立ヌ時ハ折節氷ノ解ケ醉ノサムル如ク後還リ致ス事有之者ニ候故

ニ氣一旦振立候ヘバ方ニ志立候事甚大切ナリ。

立志

志トハ、心ノユク所ニシテ我コ、ロノ向ヒ趣キ候處ヲイフ士ニ生テ忠孝ノ心ナキ者ハナシ、忠孝ノ心有之候テ我君ハ御大事ニテ我親ハ大切ナル者ト申ス事聊ニテモ合點ユキ候ヘバ、必ズ我身ヲ愛重シテ何トゾ我コソ弓馬文學ノ道ニ達シ古代ノ聖賢君子英雄豪傑ノ如ク相成リ君ノ御爲ヲ働キ、天下國家ノ御利益ニモ相成候大業ヲ起シ親ノ名マデモ揚テ醉生夢死ノ者ニハナルマジト直ニ思付候者ニテ此即志ノ發スル所也。志ヲ立ルトキハ此心ノ向フ所ヲ急度相定一度右ノ如ク思詰候ヘバ、彌切ニ其向キヲ立テ常々其心持ヲ失ハヌ様ニ特コタヘ候事ニテ候。凡志ト申ハ書物ニテ大ニ發明致シ候カ或ハ師友ノ講究ニ依リ候カ、或ハ自分患難憂苦ニ迫リ候カ、或ハ憤發激勵致シ候歟ノ處ヨリ立チ定リ候者ニテ平生安樂無事ニ致シ居リ心ノタルミ居候時ニ立事ハナシ。志ナキ者ハ魂ナキ蟲ニ同ジ、何時迄立チ候テモ丈ケノノブル事ナシ、志一度相立候ヘバ其以後ハ日夜逐々成長致シ行キ候者ニテ萌芽ノ草ニ膏壤ヲアタヘタルガゴトシ、古ヨ

リ傑俊ノ士ト申候人トテ、目四ツ口二ツ有之ニテハナシ、皆其志大ナルト逞シキトニヨリ遂ニハ天下ニ大名ヲ揚候ナリ。世人ノ人多ク碌碌ニテ相果候ハ他ニ非ズ其志太ク逞シカラヌ故ナリ。志立タル者ハ恰モ江戸立ヲ定メタル人ノ如シ、今朝一度御城下ヲ踏出シ候ヘバ、今晚ハ今莊明夜ハ木ノ本ト申ス様ニ逐々先ヘト進ミ行申候者也、譬ハ聖賢豪傑ノ地位ハ江戸ノ如シ、今日聖賢豪傑ニ成ラン者ヲ志シ候ハ、明日明後日ト段々ニ其聖賢豪傑ニ似合ザル處ヲ取去リ候ヘバ如何程短才劣識ニテモ遂ニハ聖賢豪傑ニ至ラヌト申ス理ハコレナシ、丁度足弱ナ者デモ一度江戸行き極メ候上ハ竟ニハ江戸マデ到着スルト同ジキ事ナリ、偕右様志ヲ立候ニハ物ノ筋多クナルコトヲ嫌ヒ候、我心ハ一道ニ取極メ置キ不申候ハデハ江戸ジマリナキ家ノ番スルゴトク盜ヤ犬ガ方々ヨリ忍ビ入り連モ我一人ニテハ番ハ出来ヌナリ、マダ家ノ番人ハ随分儲人モ出来候得共、心ノ番人ハ儲人ハ出来不申候、サスレバ自分ノ心ヲ一筋ニ致シ守リヨクスベキ事ニコソ。兎角少年ノ中ハ人々ノナス事致ス事ニ目ガチリ心ガ迷ヒ候テ、人ガ詩ヲ作レバ詩、文ヲカケバ文、武藝トテモ朋友ニ槍ヲ精出ス

者アレバ我今日マデ習ヒ居タル太刀業ヲ止テ槍ト申ス様ニ成リ度キモノニテコレハ正覺取ラヌ第一ノ病根ナリ、故ニ先ヅ我知識聊ニテモ開候ハバ篤ト我心ニ計リ吾所向所爲ヲサダメ、其上ニテ師ニツキ友ニ謀リ、吾及バズ足ラハヌ處ヲ補ヒ其極メ置タル處ニ心ヲ定メテ必多端ニ流レテ多岐亡羊ノ失ナカラシコト願ハシク候、凡テ心ノ迷フハ心ノ幾筋ニモ分レ候處ヨリ起リ候事ニテ心ノ紛亂致シ候ハ吾患未ダ一定セヌ故ナリ、志定マラズ心收マラズシテハ聖賢豪傑ニハ成ラレヌモノニテ候。何分志ヲ立ル近道ハ經書又ハ歴史ノ中ニテ吾心ニ大ニ感徹致シ候處ヲ書拔キ壁ニ貼シ置キ候カ、又ハ扇杯ニ認メ置キ、日夜朝暮夫ヲ認メ咏メ、吾身ヲ省察シテ其不及ヲ勉メ、其進ヲ樂ミ居リ候事肝要ニシテ志既ニ立候時ハ學ヲ勉ムル事ナケレバ志彌フトク逞クナラズシテ動モスレバ聰明ハ前時ヨリ減ジ道德ハ初ノ心ニ漸ル様ニ成リ行クモノニテ候。

勉學

學トハ、ナラフト申ス事ニテ、總テヨキ人、スグレタル人ノ善キ行ヒ善キ事業ヲ迹付シテ習ヒ參ルヲイフ。故ニ忠義孝行ノ事ヲ見テハ直ニ其人

ノ忠義孝行ノ所爲ヲ慕ヒ倣ヒ、吾モ急度其人ノ忠義孝行ニ負ケズ劣ラズ勉メ行キ候事學ノ第一義ナリ。然ルヲ後世ニ至リ字義ヲ誤リ詩文ヤ讀書ヲ學ト心得候ハ笑カシキ事ドモナリ、詩文ヤ讀書ハ右學問ノ具ト申スモノニテ、刀ノ爛鞘ヤ二階ノ階梯ノ如キモノナリ、詩文讀書ヲ學問ト心得候ハ恰モ爛鞘ヲ刀ト心得階梯ヲ二階ト存候ト同ジ淺鹵粗糲ノ至リニ候、學ト申スハ忠孝ノ筋ト文武ノ業トヨリ外ニハ無之君ニ忠ヲ竭シ、親ニ孝ヲ盡スノ真心ヲ以テ文武ノ事ヲ骨折勉強致シ御治世ノ時ニハ御側ニ被召使候ヘバ君ノ御過ヲ補ヒ匡シ御徳ヲ彌増ニ盛ンニナシ奉リ御役人ト成リ候時ハ其役所役所ノ事首尾能取修メ依怙最負不致賄賂請謁ヲ不受公平廉直ニシテ其一局何レモ其威ニ畏レ其徳ニ懷キ候程ノ仕ワザヲナシ可申義ヲ平世ニ心掛ケ居リ不幸ニシテ亂世ニ逢ヒ候ハ各々我居場所ノ任ヲ果シテ寇賊ヲ討平ゲ、禍亂ヲ克定メ可申、或ハ太刀槍ノ功名組打ノ手柄致シ、或ハ陣屋ノ中ニアリテ謀略ヲ贊畫シテ敵ヲ塵ニシ、或ハ兵糧小荷駄ノ奉行トナリテ萬兵ノ飢渴不致、兵力ノ不減様ニ心配致シ候事杯兼々修練可致義ニ候、此等ノ事ヲ致シ候ニハ胸ニ古今ヲ包ミ、腹ニ形勢機略ヲ

諸ジ藏メ居ラズシテハ叶ハヌ事共多ク候ヘバ、學問ヲ專務トシテ勉メ行フベキハ讀書シテ吾智識ヲ明カニ致シ、吾心膽ヲ練リ候事肝要ニ候、然ル處年少ノ間ハ兎角打續キ業ニ就キ居リ候事ヲ厭ヒ、忽讀忽廢シ忽習文忽講武トイフ様ニ暫ク宛ニテ倦怠致スモノナリ、此甚ダ不宜。勉ト申スハ、力ヲ推究メ打續キ推遂候處ノ氣味有之字ニテ何分久ヲ積ミ思フ詰不申候ハデハ萬事功ハ見エ不申候、マシテ學問ハ物ノ理ヲ説筋ヲ明カニスル義ニ候ヘバ、右ノ如ク輕忽粗糲ノ致シ方ニテ眞ノ道義ハ見エ不申、中有用實着ノ學問ニハナリ申サヌナリ、且又世間ニハ愚俗多ク候故學問ヲ致シ候ト兎角驕謔ノ心起リ、浮調子ニ成テ、或ハ功名富貴ニ念動キ或ハ才氣聰明ニ代リ度病折々出來候モノニテ候、コレヲ自ラ慎ミ可申ハ勿論ニ候ヘドモ茲ニハ良友ノ規箴至テ肝要ニ候間、何分交友ヲ擇ミ吾仁ヲ輔ケ吾徳ヲ足シ候工夫可有之候。

擇交友

交友ハ吾連朋友ノ事ニテ擇トハスグリ出ス意ナリ吾同門同里ノ人同年輩ノ人、吾ト交リクレ候ヘバ何レモ大切ニスベシ、乍去其中ニ損友益友候

へば則擇ト申ス事肝要ナリ。損友ハ吾ニ得タル道ヲ以テ其人ノ不正ノ事ヲ矯直シ可遣益友ハ吾ヨリ親ミヲ求メ事ヲ詢リ常ニ兄弟ノ如クスベシ、世ノ中ニ益友ホド難有難得者ハナク候間一人ニテモ有之バ何分大切ニスベシ、總テ友ニ交ルニハ飲食歡娛ノ上ニテ附合、遊山釣魚ニテ狎合候ハ不宜、學問ノ講究武事ノ練習、士タル志ノ研究心合ノ吟味ヨリ交ヲ納レ可申事ニ候、飲食遊山ニテ狎合候朋友ハ、其平生ハ腕ヲ扼リ肩ヲ拍チ互ニ知己知己ト稱シ居候へ共、無事ノ時吾德ヲ補フニ足ラズ、有事ノ時吾危難ヲ救ヒクレ候者ニテハナシ、コレハ成リ丈屢出會不致、吾身ヲ嚴重ニ致シ附合候テ、必狎昵致シ吾道ヲ襲サヌ様ニシテ、何トカ工夫ヲ凝シテ其者ヲ正道ニ導キ、武道學問ノ筋ニ勸メ込候事友道ナリ。儲益友ト申スハ兎角氣遣ナ物ニテ折々不面白事有之候夫ヲ篤ト了簡致スベシ。益友ノ吾身ニ補ヒアルハ全ク其氣遣ナル所ニテ候、士有爭友雖無道不失令名ト申スコト經ニ有之候、爭友トハ即益友也、吾過ヲ告知ラセ我ヲ規彈致シクレ候テコソ、吾氣ノ附ヌ處ノ落モ缺モ補ヒタシ候事相叶候ナリ、若右ノ益友ノ異見ヲ嫌ヒ候時ハ、天子諸侯ニシテ諫臣ヲ御疎ミナサレ候同

様ニテ、遂ニハ刑戮ニモ罹リ不測ノ禍ヲモ招ク事アルベキナリ、儲テ益友ノ見立方ハ其人剛正毅直ナルカ溫良篤實ナルカ豪壯英果ナルカ俊邁明亮ナルカ濶達大度ナルカノ五ツニ出デズ、此等ハ何レモ氣遣多キ人ニテ世間ノ俗人ドモハ甚シク厭棄致シ居候者ナリ、彼損友ハ佞柔善媚阿諛逢迎ヲ旨トシテ浮躁辯慧輕忽粗慢ノ性質アル者ナリ、此ハ何レモ心安ク成リ易キ人ニテ世間ノ女子小人トモ其才智ヤ人品ヲ譽居候者ナレドモ、聖賢豪傑タラント思フ者ハ其所擇自ラ在ル所アルベシ。

以上五目少年學ニ入ルノ門戶トコ、ロエ書聯申候者也。

右余嚴父ノ教ヲ受ケ常ニ書史ニ涉リ候處性質疎直ニシテ柔慢ナル故、遂ニ進學ノ期ナキ様ニ存シ、毎夜臥衾中ニテ涕洒ニムセビ、何トゾシテ吾身ヲ立テ父母ノ名ヲ顯シ行々君ノ御用ニモ相立。祖先ノ遺烈ヲ世ニ耀シ度ト存居候、折柄逐々吾身ニ解得致シ候事トモ有之候様覺申スニ付、聊書記シ後日ノ遺忘ニ備フ、敢テ人ニ示ス處ニアラズ、嗚呼、如何セン吾身刀圭ノ家ニ生レ賤技ニ局々トシテ吾初年ノ志ヲ遂ル事ヲ不得ヲ、然レドモ所業ハ此ニ在リテモ所志ハ彼ニ在リ候へバ、後世吾心ヲ知り吾志ヲ

憐ミ吾道ヲ信ズル者アラシク歟。

嘉永戊申季夏

橋本左内誌

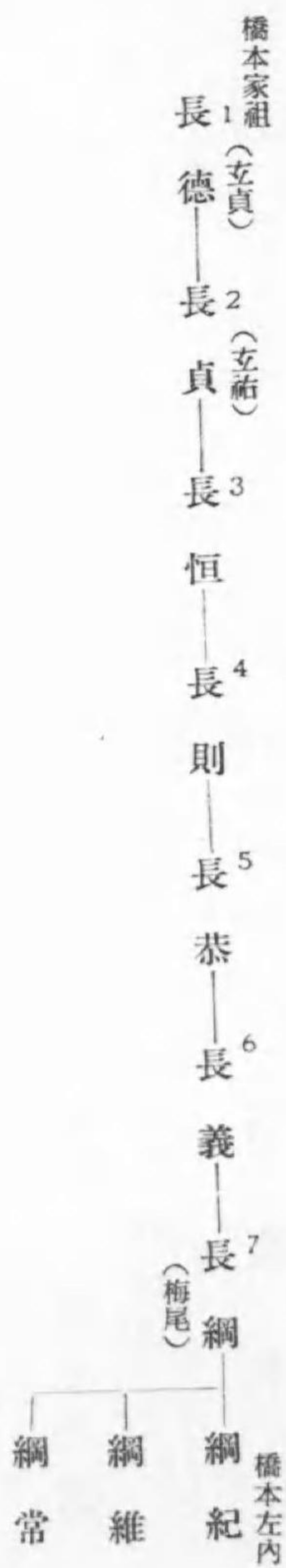
左内先生年表

皇紀	昭和十六年 ヨリ何年前	天皇	將軍	先生ノ 年齢	略	歴
二四九四	一〇七	仁孝	家齊	一	福井常磐町ニ生ル。父長綱三十才母梅尾二十一才。	
二五〇〇	一〇一	〃	家慶	七	師ニツキ學ブ。	
二五〇三	九八	〃	〃	一〇	「三國志」ヲ讀ミ破ル。	
二五〇五	九六	〃	〃	一二	福井藩ノ學者吉田東篁ニ學ブ。 宋ノ岳飛ヲ慕ツテ景岳ト號ス。	
二五〇八	九三	孝明	〃	一五	「啓發錄」ヲ著ス。	
二五〇九	九二	〃	〃	一六	大阪ニ行キ緒方洪庵ニツイテ蘭學及醫術ヲ學ブ。	
二五一二	八九	〃	〃	一九	父ノ看病及代診ノタメ大阪ヨリ歸ル。 父長綱死亡、年四十八才。藩ノ醫員トナル。	
二五一四	八七	〃	家定	二一	江戸ニ遊學杉田成卿ニ學ブ。 七月福井ニ大火自宅類焼セシモ母ノ勸メヨリ江戸ニテ修學ヲ續ク。	
二五一五	八六	〃	〃	二二	藩公ノ命ニヨリ醫員ヲ免ゼラレ御書院番トナル。 之ヨリ江戸ニアリテ四方ノ名士ト交リ國事ニ奔走ス。	
二五一六	八五	〃	〃	二三	藩公ノ命ニヨリ歸福。明道館幹事トナル。	
二五一七	八四	〃	〃	二四	藩公ノ命ニヨリ侍讀兼御内用掛ヲ命ゼラル。之ヨリ主トシテ將軍 ノ世嗣及外交ノ事ニ盡瘁ス。	
二五一八	八三	〃	家茂	二五	京都ニ上リ將軍ノ世嗣ハ賢明ナル徳川慶喜ヲ立テント努力ス。 遂ニ井伊大老ノタメニ先生ノ説ハ破ラレテ獄屋ニ投ゼラル。	

年表

二五九七	四	今上		七九	足羽山護國神社ニ合祀サル。
二五八六	一五	大正		六八	足羽山ニ先生ノ銅像建ツ。
二五五一	五〇	ク		三三	正四位ヲ贈ラル。
二五四九	五二	ク		三一	別格官幣社靖國神社ニ合祀セラル。
二五四五	五六	ク		二七	明治天皇ヨリ石碑建設ノ舉ヲ聞コシ召サレ金壹百圓御下賜。
二五四〇	六一	ク		二二	景岳會ノ基礎成ル。
二五三八	六三	明治		二〇	明治天皇先生ノ忠誠ヲ嘉セラレ金一封御下賜。
二五二三	七八	ク		五	松平春嶽公ノ命ニヨリ先生ノ遺骸ヲ足羽校南側善慶寺墓地ニ改葬セララル。
二五二二	七九	ク		四	孝明天皇ノ御沙汰ヲ以テ、故左内御赦免仰付ケラル。
二五一九	八二	孝明	家茂	二六	十月七日死罪ヲ申渡サレ斬首セララル。

橋本家系圖



昭和十六年三月二十日印刷
昭和十六年三月二十五日訂正再版發行

(非賣品)

編輯
行人兼

福井縣福井市足羽國民學校

田部井

薰

印刷人

福井市吉野上町七九

柿谷藤

雄

印刷所

福井市吉野上町七九

柿谷秀榮社

發行所

福井市足羽國民學校

終